



Title	<図書紹介>『造形論：人間の知覚』 B.H. クライント 著 岩城見一, 太田喬夫, 廣瀬孝夫, 橋本和共訳 京都書 院
Author(s)	渡辺, 真
Citation	デザイン理論. 1991, 30, p. 155-156
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52841
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『造形論—人間の知覚—』

B. H. クライント著
岩城見一，太田喬夫，
廣瀬孝夫，橋本和共訳
京都書院

本書は、ボリス・H・クライント (Borris Herbert Kleint) の著『Bildlehre — Der sehende Mensch —』第2版 (1980) を、本学会会員岩城、太田両氏を含む4人が共訳したものである。

その主旨は、表紙カバー見返しの内容紹介の簡潔な表現を借りれば、「本書は、形象になる要素と形象を造る要素 (素材と形式) から始まり、それらの関係 (秩序) と応用 (形成) とを探究し、包括的な視覚論で終る」というものである。もう少し具体的に目次に沿って言えば、全体は、1. 素材、2. 形式、3. 秩序、4. 形成、5. 周囲の世界、6. 知覚という6つの章というか大項目から成り、それぞれ、1では明度、空間性、物質性、色彩性、2では点、線、面、立体、形式、3では配置、配列、構造、4では空間、運動、表現、仕上げ、5では観察、6では眼と視覚、知覚の様態、知覚する人間、身体運動と視覚、見ることと作ること、といった中項目を含み、さらに各中項目ごとに、たとえば2の“形式”の中の“点”という中項目の場合には、基本要素・点、点の表現、点の定義、点と空間、点と形式、場、点と物質、点の表情というように非常に細かく小項目化が為されている。そして著者自身の作成になると思われる非常に多くの豊かな素描や写真が添えられており、それぞれの小項目の論点が

視覚化されている。項目数が多いことから、各項目ごとの記述は概して短かく、記述のあり方も多様である。時に定義であったり、特性記述であったり、他との比較、印象、ヴァリエーション、比喩的な関連事項の記述であったり、時には感覚訓練の具体的な提言や示唆などとなる。従ってまとまりに欠ける点がなくはないが、逆に著者の経験に基づく観察、分析の記述の豊かさが見い出される。

あえて個人的印象を含めて言えば、これは、カンディンスキーの『点・線・面』、モホリ＝ナギーの『ザ・ニュー・ヴィジョン』、ジョルジュ・ケペシュの『視覚言語』などに類したというか、その系譜の下に据えられる書である。作品として完成されたものを問題にするのではなく、それらを構成する要素やその作用、構成可能性など造形の基礎的な事柄に注目し、吟味し語るもので、造形基礎論とも言うべき内容を持つ。

最近ではこの種の著作に出会う機会が少なくなった。あったとしても色彩学や造形心理学での知見に基づく教科書的な出版物が多い。本書では、著者みずからの経験に基づき、そこで理解したこととしてすべてが語られており、示唆に豊む記述が多く散見される。

個人的興味で一例を紹介する。たとえば〈材料構造〉(147頁) という小項目の中に、

「形式と物質との間には移行段階が存在する」,「形式は集積すると物質と密接に結びつく」といった記述がある。このままでは意味不明だが、要は線や粒子形あるいは不定形の形態が集積して形象作る場合、それが形式性を明確に示す時には図形的な模様として捉えられるが、密集して単なる集積としてしか見えない場合には、物質の表面ないし断面として捉えられ、その間にさまざまな移行段階をなす形象群があるということである。

このように言うてしまうととりたてて新知見と言うほどのものではない。しかし「形式と物質との間には移行段階が存在する」という言い方が示唆しているのは、形象の視知覚的見分けの先行性である。同じ平面に再現された形象であっても、我々は一方は模様、他方は物質の表面というようにあまり意識せずに見分けてしまう。(同頁に、関連した挿図として、一方は模様、他方は物質の表面と見えるものが掲載されている)そして一方は図形的に描かれたもので、他方は物質の表面を写したものだからそう見える、というように見分けの原因を他に求めて、簡単に納得してしまう。しかしよく考えてみれば、平面上での見分けにあっては、形象の見分けこそが図形的な模様が物質の表面かの見分けに先行するのである。「図形的な模様」とか「物質の表面」というのは、形象に対する意味づけ、すなわち言語的な意味づけであり、それが見分けの第一原因ではない。言語による分節以前に視知覚的分節が成立している。そこに形象独自の世界があると言える。しかしそれについて語ろうとすれば、やはり言語による分節を出発点とせざるを得ない。

ともあれ、形象についてそれを言語的に意味づける作業ではなく、言語的分節を手掛りとして、視知覚固有の世界を浮かび上がらせようとする著者の姿勢を見てとれよう。

本書の問題点として指摘できることは、このことにも関係している。著者が使う言葉が何を捉えようとしているのかが時に把握しにくい。これは独語から日本語への翻訳というもともと翻訳作業そのものに帰因する面もあるが、もっと根本的なところは、我々の視知覚的分節と言語的分節構造の対応関係の曖昧さである。この点については著者も訳者も十分に了解されており、そのことが表明されてもいる。それにもかかわらず本書のような試みが為されることの意義は、たとえ不十分であっても言語による分節を手掛りとすることによって、視覚的世界が客体的に意識化できること、またそのことが造形基礎として試みられることに対する意識的で反省的な分節的把握の必要性にある。

ともあれ以上のような難問を抱え込むというのは造形論一般の宿命である。これにかかわって本書の内容の細部に渡って論究するのは別の機会に譲りたい。

なお本訳書では末尾に事項索引が整理され、それぞれの日本語に対して独語が添えられており、読者にとっての親切な配慮が見られる。

(渡辺 真 京都市立芸術大学)